

## 本土－沖縄間マイクロ回線工事の思い出

(関東電友会東京無線支部会報誌むせん 37号抜粋)

山根 信義

(本社五〇年退職)

前号で移動無線について書かせて頂いたが、本土、沖縄間マイクロ回線の工事に関しても、色々と印象に残る様なエピソードがあった。

昭和四十二年に私が保全局の伝送無線課長をしていた頃の話である。鹿児島統制無線中継所から突然次の様な問い合わせの電話が入って来た。

「現在首里無線中継所に、沖縄の電電公社の総裁新里さんがお見えになっており、本日午後カラーテレビの放送があるので、その時間に鹿児島でテレビ回線に挿入されているバーストキラーを抜いてスルーにして貰えないか」と云う要請があるが、どうしたらよいかとの問い合わせであった。

当時鹿児島－首里間の見透し外マイクロ回線では、白黒テレビの免許しか受けておらず、電波法上カラーテレビ信号は伝送出来ないと云うことで、鹿児島にバーストキラーを挿入して白黒テレビ信号に変換し、奄美沖縄方面に伝送していたのである。従って沖縄からの折角の要請ではあったが、お断りして貰う事にした。

その後新里総裁は、来日されたついでに鹿児島に立ち寄られてバーストキラーの装置を御覧になったり、当時技師長をされていた黒川さんにお会いになり、多少品質が悪くてもバーストキラーを抜いて、カラー信号を沖縄に流して貰えないかと、要請された事もあったが、黒川さんもこれを固くお断りになっていた。

いずれにしても、四十一年から本土側のカラー化が完了しているのに、沖縄だけが取り残されている状況で、これ以上総裁の要請を断り続けるのは、いかにも本土側が意地悪でもしている様な印象を与えかねず、これ以上お断りするのも限界ではないかと感じていた。

この様な状況下で四十四年末沖縄の本土復帰が決まり、その記念事業として四十五年一月に佐藤首相よりカラーテレビ伝送路を、政府の資金により作成することが発表されるに至った。そしてこれはあくまで推測に過ぎないが、もしも新里総裁の要請に応じて、在来の回線で、色付きテレビでも伝送していたならば、この様な見透し内回線が記念事業としては、おそらく実現しなかったのではないかと思われる。

また、沖縄の新里総裁も今は故人になっておられるが、本土側がかたくなに断り続けた真意を、その後の見越し内回線の実現でご理解頂けたのではないかと考えている。

その後工事が始まってからも次の様な事があった。当時施設局長をされていた三宅正男さんと一緒に沖縄に出張した時の事である。那覇空港で時間待ちをしていた時、たまたま待合室のテレビがカラー番組を中継していたのである。

三宅さんはびっくりされて、その理由を尋ねられた。当時沖縄の放送局は、沖縄に送られて来る白黒テレビ信号の中に、多少リークしているバースト信号を取り出してこれを増幅することにより、カラーテレビ信号を復元して品質は悪いながらもカラーで放送していたのである。

上述の様に、当時沖縄のカラー化に対する要望は極めて強く、復帰に際して長い間断絶されていた沖縄と本土を結ぶ、虹の架け橋とも云える見越し内マイクロ回線は、最高のプレゼントだったのである。

四十五年一月に沖縄の工事準備室が発足し、私とその準備室長として発令になって間もない頃、今回の記念すべき工事の状況を末永く記録に残すべく、映画を撮影する話が持ち上がった。一般の工事なら素人をお願いして済ます所であるが、今回は特に専門家に撮ってもらおうと言うことで、経費を検討した結果、数百万円はかかることが分かり、会計検査院の方が心配になって来た。

しかしこの映画の撮影に関しては、特に御執心であった川原田マイクロ部長の決断で撮影する事を決めて頂いた。その時是非わが社で撮りたいと申し出た映画会社が三社あり、この中からコンクールにより一社を選出することにした。即ち各社からシナリオと手持ちの作品の提出を求めて、選考会にかけたのである。

その結果選出されたK社の社長は、この記念すべき工事の映画が撮れる事を大変喜び、損得を度外視してでもやらせて貰うと申し出てきた。特に秘境とも云える悪石島の難工事には重点をおき、工事の最盛期には、カメラマンを常駐させる程の熱の入れ様であった。

現地の工事が或る程度進んだ頃、当時郵政省の監理官をしておられた牧野康夫さんから進捗状況の説明に来る様にとの要請があった。この為、映画会社に依頼して、今までに写し終わったフィルムを繋ぎ合わせて持参し、口頭説明で御覧頂いた。

説明の修了後、牧野さんから、この映画を明日大臣に見て頂くから、再度持参するようにとの指示があった。公社では、まだ総裁副総裁にも見て頂いていなかったもので、その時間だけを頂いた後、郵政大臣にもこの無声映画を見て頂いたのである。

その後私は沖縄が復帰する年の一月、工事の完了を待たずに東京無線通信部に転勤になり、工事とは直接関係が無くなった。その頃のある日、建築局から電話があり、心配していた会計検査が無事に終了したと云う知らせである。検査に入る前に例の映画をお見せしたところ、工事の状況が良く判ったと言うことで、細部の検査は省略して頂いたと、大変な喜びようであった。難工事と突貫工事の為に、色々と無理をしていたので心配していた関係者は、安堵の胸をなでおろしたのである。最初検査院に引っかかるのではないかと心配していた映画が、逆に思いがけない所で役立ってくれたのである。

沖縄の工事が終了してからも、この映画は「孤島に築く」と言うタイトルで中央学園や鈴鹿学園で新入社員などの訓練の際に利用して頂いた。鈴鹿学園長をされた林義昭さんからも、学園で利用していたフィルムを使い過ぎて雨が降るようになったので、リプリントしたと言う話を聞かせて頂いた事がある。この様に映画「孤島に築く」は望外の評判で大きな効果を発揮してくれ、ご指導頂いた川原田さんを始め関係された方々に心から感謝している。

本土－沖縄間のマイクロ回線が開通してから、二十数年が経過したが、NTTではデジタル化の為に、第二ルートを残して昨年廃止したとお聞きしている。

この二十数年間、我々が当初心配していた、百Kmを越える海上伝搬区間でのフェージングの問題、容易に駆けつけが出来ない悪石島の保守の問題、台風で山頂の大口径空中線が吹き飛ばされないかと言った強度の問題などが思い出されるが、いずれもそれ程大きな事故や故障も起こさず、今日迄無事に運用出来た事は、誠に喜ばしい限りであり、この回線の当初の目的であった、本土、沖縄間の架け橋としての使命を、十分に果たしてくれたものと思っている。

沖縄回線の廃止が決まった昨年暮れのある日、TRCの若生所長をお伺いした時に、沖縄回線が廃止になり、関係した資料が紛失しないようにと集めておられる話をお聞きして大変感激した事がある。

又、平成四年の第二十回迄続いた沖縄工事関係者による沖縄会も、今年は回線の廃止を記念して特別に開催しようと言う話が持ち上がっている。

終わりに、この回線の工事に尽力された多くの方々や、長年保守で苦勞された方々に心からお礼を申し上げる次第であります。

(復刻版作成：東京無線支部会報等電子化担当 田辺 正)